

初体験(1995年3月号掲載・人見 理行)



地震だ！！消防署の待機室で仮眠中であった私は今までに経験したことがない強い衝撃を受けた。揺れが終わった直後、1階受付に駆けつけ無線機を持って玄関へ出た。

玄関から西方向を見るとビルの間から赤い炎が見えたので「神消長田 54 から神消本部へ長田管内川西通 1 丁目付近で火災発生第 2 出動を要請する」と無線送信した。

この時から一昼夜に及ぶ消火活動が始まる。

第 1 現場は、消防署から 200 メートルの距離に当たる長田区川西通へ急行する。

夜明け前の道路を 200 メートル走行しただけで大惨事であることが目に入ってきた。

道路は陥没し、建物は倒壊、僅かに残る耐火建物も傾斜した状態で、私にとって考えもつかない大地震が神戸を襲ったと直感した。

第1現場では3名を救出、消火活動を開始したが、すぐ消火栓から水が出なくなった。

自然水利を求め新湊川に転戦、このとき、長田区内では10数カ所で火災が発生した。

長田消防署の当直の現有力は署員24名、消防車5台、救急車2台の人材で一度に多発した火災に対処しなければならなかった。

私は、第1現場(5時51分到着)、第2現場(6時20分到着)、第3現場(9時40分到着)、第4現場(14時到着)と転戦、長田区内の火災は時間の経過とともに焼失面積が増加し、神戸消防発足以来最大の焼失面積を計上した。

今回の阪神大震災は、市民の社会生活を破壊し生命財産を奪った。現場での消防活動は、火勢におされた有効な消火活動ができなかったことは否定できない。

しかし、消防署員は、火災・救急現場で力の限り活動している。現場活動で弊害となったものは初めて体験するものばかりでいかに臨機応変に対処できたかである。